

倫理の起点と「世界の複雑性」6 — デイヴィドソンの三角測量 The World's Complexity Related to the Beginning of Ethics (Part VI) — Davidson's Theory of Triangulation

佃 繁

TSUKUDA Shigeru

はじめに—研究経過

コミュニケーションの成立において、倫理は必然的に要請されるのではないか。このように問いを立て、システム論と言語哲学の両面から倫理の起点場面についての論考を続けてきた。ルーマンの「世界の複雑性」は、それと等価な議論を哲学に探究することで、システム論と言語哲学をつなぐ端緒を与える概念である。

佃[2015]ではタルスキの真理述語の定義について論考した。本研究が目するものは、彼が形式言語に限定して真理の概念を考察したことにある。これにより「世界の複雑性」は「真／偽」の二値論理によるコミュニケーション・システムとして縮減可能となる。

しかしルーマンが分析哲学を批判するのもこの点にある。哲学における言語論的転回は、機能分化システムを説明しきれない。「真／偽」の二値論理によるコミュニケーションの区別は、システムのパラドクスの展開の一つの方法にすぎない(佃[2014: 37-40])。

本稿では、デイヴィドソンの「三角測量」をとりあげ、それがルーマンの批判に対する分析哲学からの応答となりうることを明らかにする。「三角測量」は後期デイヴィドソンのひとつの到達点であり、しかも二値論理とは別の基準によってコミュニケーションの成立を確定するものである。本研究がデイヴィドソンをルーマン批判の応答者とみなす点がここにある。

本稿の構成は次の通りである。第1章でデイヴィドソンの「三角測量」について概説し、第2章で「三角測量」を可能にする真理・信念・意味の相互依存関係を考察する。第3章では、哲学が真理から意味へと重点を移したことを考察し、デイヴィドソンの理論を「世界の複雑性」への対応とみなしうる根拠を明らかにしたい。最後の第4章で三角測量についての本稿の見方をまとめ、次稿で明らかにすべき課題を示す。

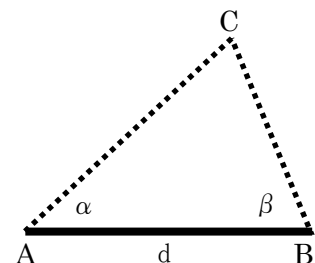
1. 三角測量

メタファーとしての「三角測量」¹の機能は一見単純である。デイヴィドソンはかつて新奇な意味を喚起しないメタファーを「死んだメタファー (dead metaphor)」(Davidson[1984=1991: 273])と表現した。「三角測量」はそれに近い。しかし1.2に示すように、三角測量の測量学的な条件の具体を知ることで、デイヴィドソンの「根源的解釈」(1.2.2に詳述)の理解を豊かにする効果がある。そう

いう意味では「生きたメタファー」である。

1.1 測量学における三角測量

まず三角測量について測量学的な意味を示しておきたい。△ABCの2点A、Bの位置および∠Aと∠Bの大きさを既知とする。このときAC間、BC間の距離が計算によって確定され、Cの位置を正確に決定することができる。これを三角測量という。いま測定値をAB=d、∠A=α、∠B=βとしよう。AC間およびBC間の距離は、基線ABの長さdと正弦定理から次のように求められる。



$$AC = \frac{\sin \beta}{\sin(\alpha + \beta)} d, \quad BC = \frac{\sin \alpha}{\sin(\alpha + \beta)} d$$

d、α、βのデータが既知であることが要点である。この条件から地点Cの位置を測定しうることが、デイヴィドソンの意味理論でメタファーとしての効果を産みだす。

1.2 デイヴィドソンの「三角測量」

1.2.1 意味の「測量」

デイヴィドソンの「三角測量」をメタファーとみなす理由を述べておきたい。

測量とは、対象の位置に関するデータを測定し、それを処理する技術である。三角測量では、距離(AB間)と角度(∠A、∠B)の測定から得られたデータ(d、α、β)を処理する。

よって、測量という語を文の解釈に用いること自体がメタファーである。デイヴィドソンの「三角測量」は、観察記述・発話文・出来事のデータを用いて発話解釈をおこなう。意味を「測量」するのである。

しかしそれだけではない。三角測量を構成する3地点には測量学的な関係があり、それがメタファーとして機能する。他の測量法と比較してみよう。三辺測量、オフセット測量、トラバース測量もまた、既知の測点A、Bから、Cの位置を決定する測量法である。測定データとして利用されるのは、順に「三角形の三辺の長さ」「二辺の長さと夾角」「直角三角形の直角を構成する二辺の長さ」である。これらの測量法が距離データを2つ以上用いるのに対し、三角測量は基線ABの距離(d)だけを使用し、2角(∠A、∠B)の交差点Cを決定する。

この「基線の距離」「2角の交差点」という関係性をメタファーとして反映させたのがデイヴィドソンの「三角測量」なのである。基線によって関係づけられる2地点A、Bとは、生物Aと生物Bのコミュニケーションのメタファーである。また∠Aと∠Bの交差点としてのCは、生物A、生物Bが出来事Cを刺激として共有することのメタファーである。コミュニケーションがAB間(基線)に限られ、他の手がかりはCに関する情報(∠A=α、∠B=β)しかない。この条件で意味決定をおこな

うことを、「三角測量」というメタファーは示している。

1.2.2 意味の三角測量

三角測量（※以下では測量学と区別する必要がないため引用符を解除）は、出来事 C を共有する生物 A、B のコミュニケーション場面に見出される。思考の出現において三角測量がおこなわれる前言語的な状況²をデイヴィドソンは次のように説明する。

その基本的状況は以下のようである。二個かそれ以上の生物個体が、自分たちの相互作用と彼らが共有する世界との相互作用を同時に行う。私はこれを三角測量と呼んでいる。(略) それぞれの生物が、他の生物の反応を、自身もそれに反応する世界内の変化や対象と結びつけることを学ぶ。

(Davidson [2001a=2007 : 207])

思考の出現と類似の場面に未知の言語の話し手の発話解釈がある。デイヴィドソンはそれを「根源的解釈」³ (Davidson [1984=1991 : 142]) と呼ぶ。いま以下のように根源的解釈場面を設定しよう。

未知の言語が話される土地で、言語学者 A は現地人 B が「Gavagai」と発話するのを聞いた。言語学者 A は未知の言語「Gavagai」の意味を知ろうとしている。

現地人 B が「Gavagai」と発話したのは、一匹の白ウサギがさっと走り抜けたときであった。言語学者 A もこの出来事を同時に観察している。

以上の設定で三角測量がなされたとする。上の引用にしたがい三角測量の構成要素として「二個かそれ以上の生物個体」「共有する世界」「相互作用による反応」を考える (表 1)。

(表 1) 根源的解釈場面

三角測量の構成要素	場面設定の内容
二個かそれ以上の生物個体	言語学者 A、現地人 B
共有する世界の出来事	一匹の白ウサギがさっと走り抜けた
世界との相互作用による生物個体それぞれの反応	(A) 観察記述「ウサギだ」 (B) 発話文「Gavagai」
生物個体どうしの相互作用	B の発話を A が解釈するためのコミュニケーション

デイヴィドソンは三角測量を「三重の相互作用の結果」(Davidson [2001a=2007 : 207]) と説明する。それぞれの相互作用とその結果を示すと次のようになる。

①<世界—言語学者 A>間の相互作用

出来事 (一匹の白ウサギがさっと走り抜けた) により、言語学者 A は「ウサギだ」と観察する。

②<世界ー現地人 B>間の相互作用

出来事（一匹の白ウサギがさっと走り抜けた）により、現地人 B の発話「Gavagai」が生じる。

③<言語学者 Aー現地人 B>間の相互作用

発話解釈を目的として、言語学者 A は現地人 B とコミュニケーションをとる。「他の生物の反応を、自身もそれに反応する世界内の変化や対象と結びつける」と説明される活動である。A はウサギだと観察し、B は「Gavagai」と発話した。この2つの反応をウサギが走り抜けるという「世界内の変化や対象」に結びつけるためのコミュニケーションである。

場面状況から、言語学者 A は「Gavagai はウサギを意味する」と仮定し、現地人 B に対し検証活動をおこなう⁴。まず、発話対象がウサギであるとわかる場面を設定し、言語学者 A が「Gavagai」と質問して現地人 B を観察する。すると現地人 B は肯定的な態度を示した。次に、ウサギではあるものの最初と異なる条件（動かないウサギ、複数のウサギ、色の異なるウサギ、ウサギの写真等々）で確かめてみる。それでも現地人 B の肯定的な態度は繰り返された。このような検証活動とともに「Gavagai はウサギを意味する」という解釈の正しさは高まっていく。

2. 根源的解釈

2.1 信念をもたらす原因の共有

根源的解釈にとって、1.2.2-③のようなコミュニケーションは不可欠である。デイヴィドソンは次のように説明している。

（略）方法論的に最も基礎的な事例においては、信念の対象を、その信念の原因と解さなければならぬ。（略）コミュニケーションは、原因が収斂するところから始まる。つまり、あなたの発話が私の発話と同じ事柄を意味するのは、発話が真だという信念が、同じ出来事や対象から系統的に結果としてひき起こされている場合である。（Davidson [2001a=2007 : 240]）

言語学者 A が現地人 B の「Gavagai」という音声を聞いた時点では、まだコミュニケーションは始まらない。言語学者 A は「Gavagai」が咳払いの音だと考え、無視することもできる。コミュニケーションが開始されるためには、言語学者 A が音のつらなり「Gavagai」を現地人 B の発話とみなす必要がある。

言い換えると、言語学者 A が三角測量を意図することによって「Gavagai」は単なる音の連続ではなくなる。本研究では、解釈しようとする側にまず倫理的な原則が課せられることでコミュニケーションが開始されることを考察した（佃[2010 : 63-64]）。寛容の原則と呼ばれるこの規範的な要請は、三角測量においても本質をなす。「他の生物の反応を、自身もそれに反応する世界内の変化や対象と結

びつけることを学ぶ」とデイヴィドソンが説明したのはこのことにほかならない。それは解釈側に求められる態度であり、ここにコミュニケーションにおける倫理の起点がある。

言語学者 A は根源的解釈を始めるに先立ち、同じ出来事を原因とする信念獲得の過程が、現地人 B にもあてはまると考える⁵。発話「Gavagai」には現地人 B の信念がともなう、B に信念をもたらした出来事は自分の信念の原因としての出来事と同じである、と言語学者 A は考える。

2.2 信念と真理の相互依存

発話解釈では信念、真理、意味の三者を考慮せざるをえない。それをデイヴィドソンは次のように説明する。

困難の中心源は、信念と意味が相重なって発話の理由を説明するその仕方にある。ある場面である文を真だとみなす話し手がいるとする。その文を発話することで意味する、または意味しようとするのが部分的理由となって彼はそうするのであり、また同時に彼が信じていることも部分的理由なのである。発話が誠実であるという事実しか頼るべきものがないなら、意味を知らずに信念を引き出すことはできないし、また信念なしに意味を引き出すという見込みもない。

(Davidson [1984=1991 : 146] ※佃訳)

この困難を克服するためにデイヴィドソンが用いるのが、「真である」とみなす信念である。客観的に真である発話文や記述文があるとする。この場合、話し手や記述者がその文を偽であると信じて発話や記述をおこなったということはいえない。

この信念と真理の相互依存関係を背景として、言語学者 A は次のようにそれぞれの信念を並置する。

(A の信念) 「ウサギだ」は真である。

(B の信念) 「Gavagai」は真である。

解釈の手がかりは 2 つの信念の原因である。状況から、それぞれの信念獲得が同じ出来事に起因することは明らかであろう。しかしまだ「Gavagai はウサギを意味する」と結論できない。ひきおこされる B の信念（心的内容）にはいくつもの選択肢がある。獲物を「逃してしまった」との嘆きかもしれない。白ウサギを目にすることがその部族にとって良い兆しであるため「神よありがとう」と感謝したということもありうる。言語学者 A は諸選択肢からいずれかを採用して解釈を進めなければならない。ところが「Gavagai」の意味がまだわかっていないために、どの信念が最適なのか決まらない。

信念と真理の相互依存関係だけでは、これ以上解釈を進めることはできない。次にデイヴィドソンが利用するのは、タルスキの T 文である。

2.3 真理と意味の相互依存

T 文の分析から、真理条件的意味論をデイヴィドソンは提案した。T 文とは「 x が真である $\equiv p$ 」と示される同値関係式であり、 x には文の名が入り、 p にはメタ言語 (x の真理定義をおこなうための言語) における x の翻訳が入る。同値式は必要十分条件の関係を示す。つまり T 文は「 x が真である」ための必要十分条件が p であることを示す。デイヴィドソンは p に x の翻訳が入ることに着目し、 x の真理条件 p を x の意味とみなすことが可能だと考えた。言語から言語へと「意味の保存」(Davidson [2005b=2010 : 138]) をおこなうのが翻訳だからである。

この信念—真理の依存関係から次の 2 つの T 文が導かれる。

(T_A) 文「ウサギだ」が真である \equiv ウサギだ

(T_B) 文「Gavagai」が真である \equiv Gavagai

言語学者 A は (T_A) と (T_B) から次の T 文を仮定する。

(T) 文「Gavagai」が真である \equiv ウサギだ

われわれはようやく 1 回目の三角測量における最終段階に到達した。真理条件的意味論により、文「Gavagai」の真理条件は右辺の「ウサギだ」であり、同時にそれは文「Gavagai」の意味である。言語学者 A は「Gavagai はウサギを意味する」という仮定を導き出した。仮定を検証するために、言語学者 A は新たな三角測量場面を設定することになる。

2.4 促された同意—意味と信念の分離

根源的解釈において、仮定は「非個別的 (nonindividuating)」(Davidson [2001a=2007 : 325]) に検証されねばならない。信念と意味が重なりあって発話がおこなわれる。意味だけを取り出して検証することができない。論点先取の誤りを犯さないためには、信念の命題的内容 (=意味) によって個別化するという方法をとらずに検証する方法が必要である。

デイヴィドソンはここでクワインの「促された同意」(Davidson [2001a=2007 : 234]) を採用する。

現地語に文 S_1 、 S_2 、 S_3 が含まれていて、実際にはそれぞれ「動物だ」「白い」「ウサギだ」に翻訳するのが正しいとしてみよう。(略) そのとき S_3 が自発的に発話されるということが生じたすべての状況のなかで、現地人が進んで S_1 に同意することにいかにして気づくのであろうか。また S_2 が自発的に発話されるということが生じた状況のすべてではないにせよ、おそらくはいくつかの状況で、現地人が進んで S_1 に同意することに、どのようにして気づくのであろうか。それは、言語学者がイニシアチブをとって現地語の諸文と諸刺激状況の組み合わせを質問し、最終的に満足のゆくように推測を絞っていくということによってのみである。(※段落かわる) それゆえわれわれの言語学者は、さまざまな刺激状況のそれぞれにおいて「Gavagai?」と問い、現地人が同

意を示しているのか、不同意を示しているのか、あるいはそのいずれでもないのかを、それぞれの場合ごとに書き留めるのである。(Quine[1960=1984:45] ※訳は佃)

論点先取的に検証しないということが実際にどういうことか、ということをクワインは示している。「Gavagai はウサギを意味する」と仮定したものの、まだ「動物だ」や「白い」を意味するという可能性を否定できない。「ウサギ」、「動物」、「白い」を区別できる方法が必要である。

いま現地語の文 S_1 を「Ganimal」、 S_2 を「Gite」とし、それぞれ「動物だ」「白い」を意味するとしよう。ただし言語学者にはまだそれぞれの意味は判別できない。「Gavagai」の発話時と同じ状況を設定して「Ganimal?」と尋ねれば、つねに現地人 B は同意の態度を示すであろう。また「Gite」と発話したのと同じ状況（白いウサギ、白馬、白い皿、白い壁等々）を設定して「Ganimal?」と問うと、同意と不同意の場合がある。「白いウサギ」や「白馬」に対しては同意する。しかし「白い皿」には不同意であった。クワインが説明するのはこのような状況である。

同意、不同意は、態度と現地語で「yes」や「no」を意味する簡単な発語によって直接的に判別される。いま現地語で「yes」や「no」を意味する語を知ることができておれば、その語と現地人の態度によって同意／不同意が判別できる。

ここで私が念頭においている特別な態度について実例をあげると、あるときにある文を真であると見なす、ある文が真であったほしいと欲する、ある文よりも別の文が真であることを好むといった種類の態度である。このような態度が認知可能だとする想定は、いかにしてそれらの態度に内容を与えるのかという問題を避けたことにはあたらない。なぜなら、真と見なすというような話し手と発話とのあいだにある関係は外延的であり、その文が何を意味するか知らなくても、真であるとみなす関係があることが探知されうるからである。これらの態度は非個別的である。というのも、本来これらの態度は心理的なものであるものの、異なる発話があらかず命題的内容の違いを区別するものではないからである。(Davidson [2001a=2007:325] ※佃訳)

信念、欲求、意図にかかわる発話は命題的内容をもつとともに、心的な性格をもつので目に見えない。発話の解釈が問題となるのはそのためである。

しかし、同意／不同意の態度や、「yes/no」に相当する語で答えることは、異なる命題的内容であっても共通である。つまり、内容を特定せずに同意・不同意のデータをとることは可能である。

そこで「現地語の文と刺激状況」の組み合わせをいくつもつくり、同意／不同意の記録を蓄積する作業がおこなわれる。やがて「Ganimal は白いを意味しない」や「Gite はウサギを意味しない」等の推論が進み、最終的に「Gavagai はウサギを意味する」と結論される。つまり「Ganimal」、「Gite」、

「Gavagai」がその命題的内容を特定され、個別化される。言語学者 A はここでようやく、意味と信念が混ざり合った発話文から、意味だけを分離することに成功したのである。

ここまでの考察をまとめておきたい。デイヴィドソンの三角測量は、根源的解釈を典型的な場面とするコミュニケーションに適用される概念である。三角測量が有効なのは、発話において真理と意味と信念が相互依存しているからである。三者の相互依存から命題的内容を特定するために、デイヴィドソンはタルスキ流の真理の理論を援用する。次節では、タルスキの理論の検討から、デイヴィドソンが「真理の概念」と呼ぶものが三角測量ではたす役割を明らかにする。

3. 真理の概念と三角測量

3.1 タルスキの定義の変更

デイヴィドソンは、真理の理論 (a theory of truth) と真理の概念 (the concept of truth) を使い分けて説明をおこなう。これに関して2つのデイヴィドソンの主張をまず示しておきたい。

[D1] ある言語のための真理の理論が正しいことを私たちはどうやって知るのかという問いに、規約 T は答えない。真理の概念は、信念や意味の概念と本質的な結びつきをもっている。しかし、こうした結びつきはタルスキの仕事によっては触れられていない。

(Davidson [2005a=2010 : 38] ※佃訳)

[D1]における真理の理論と真理の概念の使い分けは、タルスキの論証の根幹に関係している。タルスキの真理の定義づけは、特定の言語に限定しておこなわれるからである (佃[2015])。真理の述語を言語一般に定義することは、自然言語 (日常会話言語) において矛盾を免れない。それを論証した上で、タルスキは形式言語に限定して真理の述語の定義を考察している。[D1]で「ある言語のための真理の理論」とデイヴィドソンがいうのはこのことである。言語ごとに定義の理論が存在することを「a theory of truth」という表現は示している。

デイヴィドソンはしばしば「タルスキ流の定義」という言い方を用い、タルスキの方法に変更を加えて解釈理論の構築に援用する。本来のタルスキの定義方法は、次のように構成される。

- (i) 形式化された特定の言語を対象とする。
- (ii) i の言語を対象とする真理の述語の再帰的な定義づけをおこなう。
- (iii) ii の再帰的定義を明示的定義に変換する。

[D1]にみるように、デイヴィドソンはタルスキの仕事をそのまま使えろと考えなかった。言語・行為・心の統合的な理論の構築が、デイヴィドソンの目的だったからである。したがって i ~ iii は次のように変更される。

①自然言語を対象として解釈理論を構築する。

②真理の述語を原始概念とする公理的理論の手法をとり、再帰的定義から明示的定義への変換をおこなわない。

③寛容の原則を適用して真理条件を意味とみなし、解釈を進める。

アリストテレス的序列が崩れた近代では「世界の複雑性」が上昇する。それを縮減するのが社会の機能分化である(佃[2011])。本研究の目的からいうなら、論理実証主義と関わりが深かったタルスキもまた「世界の複雑性」と向き合っていたとみなすことが可能である。佃[2015: 33-35]で考察したように、タルスキは物理主義の立場にあった。論理実証主義のそれとは異なり、演繹科学と物理学に代表される経験科学以外の「第三の科学」の導入を認めないというのがタルスキの物理主義であった。言語を物理主義的に限定することは世界を部分化して複雑性を縮減することにほかならない。ルーマンであれば、コミュニケーション・システムの分化とみなすであろう。

一方デイヴィドソンは、タルスキを選択的に継承することで、タルスキが部分化した世界を全体世界へと回復し、そのうえで複雑性の縮減をおこなったといえる。タルスキが物理主義的に限定したコミュニケーションを、全体社会の自然言語コミュニケーションに戻す。その方法が①～③になる。真理の定義ではなく解釈理論の構築を目的とする(①)。そのために公理的理論の方向性をとる(②)。解釈のための三角測量は寛容の原則にもとづく(③)。①～③はすべて複雑性の縮減の観点から説明することが可能である。本稿では3.2で①と②について考察する。③については、広範囲な観点を含み詳細な検討が必要であるため次稿で扱う。

3.2 真理の概念の公理化

デイヴィドソンはタルスキの方法について下のように説明している。

タルスキの定義はいくつかのステップをへて達せられる。十分に形式化された表現(特に閉鎖文)という概念が定義される；充足関係の再帰的定義がある(充足とは高度に一般化された指示の概念である)；真理が、文と充足の概念にもとづいて定義される；再帰的定義が明示的定義へと転換される。最後のステップは、当面の目的からは忘れることが最善である。すると、われわれに残されるのは厳密な意味での定義というものではまったくない。残るのは、未定義概念の再帰的な特徴づけ、つまり充足の再帰的な特徴づけなのである；真理は、充足つまり意味論的概念に置き換えられて定義されたものであり、たとえ特定の言語であっても、もはや非意味論的に定義されたなどということはいできない。(Davidson [2001a=2007: 282]、※佃訳。下線強調は佃)

明示的定義のステップを「忘れる」というデイヴィドソンの「当面の目的」とは何か。三角測量に

依拠した意味の理論の構築にほかならない。

デイヴィドソンとタルスキの目的の違いについて飯田は次のように述べている。

タルスキ本来の意図のためには、真理定義はあくまでも明示的定義へと変換可能な定義である必要があった。しかしながら、目的が異なれば、公理的理論を提示するものとして帰納的定義を解釈する方がよい場合もある。(飯田[2002 : 197])

以下飯田(2002 : [175-200])を参考に、両者の目的の違いの具体について説明する。

タルスキの目的は、論理的矛盾を生ずることなく真理の述語を用いることにあった。再帰的定義では、定義の中に定義される語が用いられる。その循環を解消するために明示的定義への転換がおこなわれる。現在では「集合への量化」という手段を用いることが転換の一般的方法である。明示的定義が可能であることを示すことは、タルスキの方法が「真理の概念を用いても新たな矛盾に導かれない」(飯田[2002 : 196])という証明になる。

一方デイヴィドソンの目的は自然言語の意味論の構築にあった。しかし公理的手法をとると最初から示されていたわけではない。第一論文集『真理と解釈』(1984)の序論で、初期論文「真理と意味」(1967 初出)をふりかえり、次のように説明している。

徐々にというほかないかたちで私を促したひとつのこと、それは(略)(タルスキとは)逆のことを意図するということだった。私は真理を中心的な原始概念であると考え、真理の構造を詳述することによって、意味に至ることを望んでいた。(Davidson [1984=1991 : vi] ※佃訳)

上の引用の通り、「真理と意味」ではまだ公理的手法について言及されていない。「明示的に定義されるにせよ、再帰的に特徴づけられるにせよ」(Davidson [1984=1991 : 8])という表現はある。しかしまだ明示的定義への転換を「忘れる」としたわけではない。意味の理論にいたるまでに「真理の概念がいかなる顕著な役割も果たしていなかったことは強調に値する」と述べられている箇所がある。しかし「顕著な役割を果たさない」のは、真理の概念の直観的な把握があるからだと言われたいわけでもない。1967年の時点ではまだ、真理を原始概念として用いるという明確な方針は示されていない。

しかし6年後の論文「根源的翻訳」(1973)では「真理を基本的なものとして受取り、その上で翻訳ないし解釈についての説明を引き出す」(Davidson [1984=1991 : 133])と説明される。「真理と充足という原始概念」という句が用いられ、次のようにタルスキとの違いを明確に示される。

タルスキが示したように、もし理論の言語が十分な集合論を含んでいるならば、よく知られた手

順に沿って、このような再帰的理論を明示的定義へと変えることができる。だが、われわれはこの余分な手続きには関わらない。(Davidson [1984=1991 : 129-130] ※下線強調は佃)

3.2 冒頭の引用で「最後のステップは、当面の目的からは忘れることが最善である」とされたのと同じ方針がここで示されている。1967年にはまだ明示されなかった公理的理論の方向性が、6年かけて根拠（「余分な手続きである」）とともに述べられるようになったことがわかる。

飯田が指摘したように、タルスキは矛盾を導かないことを第一の目的としていた。一方デイヴィドソンは1967年の「真理と意味」でタルスキとの違いを次のように断言している。

他に選択肢はないと私は考えるので、ある自然言語に対する真理述語の形式的な特徴づけの諸可能性についての楽観的で計画的な (programmatic) 見解を、私は採ってきた。

(Davidson [1984=1991 : 26] ※佃訳)

デイヴィドソンにとって、再帰的定義（＝「真理述語の形式的な特徴づけ」）が自然言語でもちうる可能性こそが重要であった。この「楽観的で計画的な見解」がその後の公理的理論の方向性へと進展し、「真理と意味」から28年後に「楽観的で」ある理由は明確に説明される。

[D2] タルスキは真理について公理的理論を与える可能性に気づいていた。そして「そのような公理的手続きには、本質的に間違ったところはないし、様々な目的のために有用であると判明するかもしれない」(Tarski [1944=1987 : 72]) と述べていた。真理概念の公理的取扱いより明示的定義のほうを好む理由を、タルスキは数多くもっていた。ひとつめ、彼は、公理の選択は「(たとえば、私たちの知識の現状といった) 本質的でない要因に依存しており、いくぶん偶然的な性格をもつ」と述べている。二つめ。(新しい原始概念を導入するまえの体系が無矛盾であるとの仮定のもとで) 明示的定義だけが、結果する体系の無矛盾性を保証することができる。三つめ。その概念は「科学の統一」という養成や物理主義の要請と調和するの否かという疑問を、明示的定義だけが抑えることができる (Tarski [1936→1983 : 405-406])。ひとつめの危険性は、設定される諸公理を充足の特徴づけに必要な再帰節だけに制限するならば回避される。二つめの危険性は、パラドクスを生みだすことが知られている方法を導入しない限りは、(確実にといわけではないが) 避けられる。真理が物理的概念に還元されるとは判明しないかもしれない、という恐れは、私の見解では、そこから逃れることを希望できる恐れでもないし、またそうすべき恐れでもない。(Davidson [2005a=2010 : 226])

本稿 3.1 でも触れたように、タルスキの物理主義については前稿で考察している(佃[2015:33-35])。物理主義は、タルスキを含む論理実証主義運動における「世界の複雑性」への対応であり、かつ対応の限界でもあった。それが本研究の見解である。二値論理にしばられていると分析哲学批判をおこなったルーマンも同様の立場にある。

デイヴィドソンは分析哲学の限界にとらわれていないとする本研究にとって、[D2]の最後の箇所こそが彼をそのように位置づける理由である。タルスキは対象言語とメタ言語という区別を導入して矛盾を回避した(佃[2015:32-33])。ルーマンはそれを「方法的隘路におちいつている禁止」であり、「定式化しなすなければならぬ」と批判する。「循環論法やそれに類する誤りを避けるという規則」ではなく、「自己言及のできる理論を認めるという規則」におきかえるというのが、ルーマンの提案である(Luhmann[1990=2009a:60], 佃[2014:37-40])。

デイヴィドソンは、言語の階層性にもとづく規約 T を用いる点ではタルスキにしたがう。1935年の論文でタルスキは規約 T を次のように示している(原文の「if and only if」を同値記号にした)。

(規約 T) 真である文の集合 Tr について、その形式的に正しい定義がメタ言語において定式化され、適合的な真理の定義と呼ばれることになるのは、その定義が次の帰結をもつときである。すなわち

(α) 「 $x \in Tr \equiv p$ 」において記号 x を 任意の文の構造記述名で置き換え、記号 p をその文のメタ言語への翻訳となる表現で置き換えることによって得られる文のすべて。

(Tarski[1935→1983:187-188])

また、規約 T で「 $x \in Tr \equiv p$ 」と示されている図式 (scheme) は、別の論文において次のように提示され、一般的に T 文と呼ばれるようになる。

(T) x が真である $\equiv p$ (Tarski[1944=1987:59] ※規約 T にあうように表現を改めた)

T 文をつくるには、メタ言語において対象言語の文の翻訳が利用できるというのが前提である。タルスキはそのために対象を形式言語に限定し、翻訳の定まったメタ言語を用いて再帰的定義をおこなっている。しかしデイヴィドソンの根源的解釈では翻訳マニュアルはまだ存在しない。言語学者 A の事例の場合、現地人 B の発話から A がつくりうる T 文は次のように不完全なものとなる。

(T) 「Gavagai」が真である \equiv 「Gavagai」の翻訳となる日本語の文

右辺の不完全性こそがデイヴィドソンの着想の中心である。もし「Gavagai」の翻訳となる日本語の文を得ることができれば、それを「Gavagai」の意味とみなすことができる。つまり T 文を意味の

理論の手段として用いるという提案なのである。

タルスキの意図は、同値表現をもつ T 文の右辺に、述語「真である」の適用範囲を示すことにあった。したがってメタ言語における翻訳を右辺におくことが可能になるよう、最初に言語設定がなされる。その過程で不可欠とされるのが無矛盾性であり、よって形式言語に限定される。最終的に述語「真である」が消去される明示的定義は、タルスキの理論にとって無矛盾性の保証なのである。

しかしデイヴィドソンは無矛盾性を目的としておらず、二値論理にとらわれない。言語学者 A は、現地人 B の T 文の右辺に入る日本語文を求めている。T 文の二値論理性は目的ではなく方法であり、真理の概念が原始概念（未定義語）として用いられる。その T 文を利用して言語学者 A は三角測量をおこない、翻訳マニュアルを作成するのである。

3.3 真理から意味へ

公理的理論の採用へとデイヴィドソンを進ませたものは何か。論文「規約 T の擁護」（1970 初出）において彼は「真理の理論はどうやって真理から意味に似たなものかへと進み得るか」（Davidson [1984=1991 : 70] ※佃訳）と問いを立て、次のように説明する。

真理理論を信頼できる解釈理論にするうえで、ひとつの重要な因子、じっさい本質的ともいえる因子は、話者と時への相対化である。指標的あるいは直示的な成分が現れている場合、文一般が真や偽であるということは不可能である。しかし話者と時に相対的な文に限れば真や偽であることが可能である。（Davidson [1984=1991 : 70] ※佃訳）

「真理から意味へ」という方針が、デイヴィドソンを発話と話者の分析へと向かわせている。誰かに発話されなければ文は生じず、意味も発生しない。誰がいつその文を発話したかを明らかにしなければ、文の真偽が決定できない。1970 年にすでにみられたこの観点は、31 年後の次の主張となる。

（真理の概念の先行把握についての）考察をふまえれば、タルスキの真理の理論を真理についての説明とみなした場合に、そこに欠けているものが何なのかという点を、非常に明快に述べることができる。（※段落かわる）欠けているのは言語使用者とのつながりである。（略）それゆえ真理に関する完全な説明はどれも、真理を現実の言語的やりとりに関係づけなければならない。

（Davidson [2001a=2007 : 246]）

「真理から意味へ」と重心を移動させることにより、人間が視野に入ってくる。タルスキが対象としたのは真理だけであった。しかし「現実の言語的やりとり」と無関係に真理はありえない。言語使

用者との関連づけの必要を語るデイヴィドソンは、次のローティの発言と同じ立場にある。

真理が人間の心から独立して存在するということはありえない(略)。文がそのような形で存在し、そこに在るということはあるからである。世界はそこに在る、しかし世界の記述はそこにはない。世界の記述だけが、真か偽になることができる。(略) 世界は話さない。ただ私たちのみが話す。(略) 文だけが真になりうるのであり、人間存在は(略) 言語によって真理をつくるのだ。

(Rorty[1989=2000:17])

佃[2012]では、ローティの理論を検討し、文の偶然性を「世界の複雑性」ととらえることを提案した。「言語は、真の世界や真の自己の本当の姿を次第に獲得してゆく媒介物ではなく、歴史的な偶然性」(Rorty[1989=2000:110])であるとローティはいう。中世の形而上学から近代認識論への移行において、実在との対応にもとづく真理という観念が重要な役割を果たしてきた。この真理の対応説を棄却したのがクワインとデイヴィドソンだ、というのがローティの見解である。

条件付きではあるものの⁶、デイヴィドソン自身もローティによる位置づけを受け入れている。本稿が考察してきたように、デイヴィドソンは信念と真理の結びつきを利用して根源的解釈を進める。

「信念は本質的に信頼のおけるもの」とみなすデイヴィドソンにとって、対応説は「真理を全面的に信念から切り離すことになる」がゆえに退けざるをえない(Davidson [2001a=2007:244-246])。

ローティにしたがい、本研究はデイヴィドソンによる公理的理論を以下のように位置づける。

対応的真理観を排し、人間が言語によって真理をつくるという観点に立つとき、発話はその典型的な場面となる。発話文の真理性は、話し手の心(信念)から独立にはありえない。解釈者もまた発話の真理性と話し手の信念の存在を疑わない。発話の真理性と話し手の信念への信頼を基盤することによってのみ解釈が可能となり、自然言語のコミュニケーションは成立する。

「真理から意味へ」というデイヴィドソンの方向性は、哲学における「世界の複雑性」を増大させる。自然言語による発話へと解釈対象が拡大されるからである。その対応として、デイヴィドソンは真理を原始概念とみなす公理化理論を採る。真理の概念をそのように扱うことでデイヴィドソンは「タルスキが準備したもの」(佃[2015])を超えるのである。

4 今後の課題—思考の前提としての公共的世界

前章で[D1][D2]というデイヴィドソンのタルスキ批判を手がかりに、哲学における「真理から意味へ」という変化を考察した。ローティによるなら、それは「実在」という見方から「世界の記述」への移行であり、ルーマンの社会システム論が視野に入ってくる地点でもある。

本稿の結論を要約すれば、三角測量とは「真理から意味へ」と哲学の重心が移動したことのメタフ

ァーである、となるだろう。しかしそれだけではない。三角測量というメタファーを梃子として、デイヴィドソンは思考の出現と公共的世界の存在を説明する理論の構築へと向かう。「倫理の起点」とは思考の前提となる公共的世界のことなのではないか。これが次稿の課題となる。

[註]

- 1 デイヴィドソン自身も「三角測量」をメタファーとみなしている (Davidson[2001=2001:198])。
- 2 デイヴィドソンによるなら「前言語的で前認識的な状況」において三角測量は可能である。瞬時に他の動きに反応する魚群、猿の警戒鳴き声への他猿の反応がその具体例であり、「複雑かつ合目的ではあれ、命題的な信念や欲求、また意図によるものではありえず、彼らのコミュニケーションの流儀は言語をかたちづくらない」 (Davidson[2001=2001:198])。
- 3 クワインの「根源的翻訳」との比較のために用いられている。「意味論的なものへの一層の強調」 (Davidson[1984=1991:142]) をねらいとする。
- 4 2.2 と次註で述べるように、A と B に信念 (真であると信じること) をもたらした共通の出来事が真理性の証拠にもなる。また 2.4 で説明するように、出来事という刺激が A と B の信念に命題的内容 (意味) を与える。よって「文の意味を決定するものが、通常はこれらの文を真にするものでもある」 (Davidson[2001a=2007:296])。信念－真理、信念－意味は、出来事を介して相互依存関係的であり、「真理と意味をつなぐのが信念の役割」 (Davidson[2001a=2007:33]) といえる。
- 5 この箇所には省略がある。自分の心的内容は自分が最もよく知っているという「第一人称の権威」 (Davidson[2001a=2007:16]) について、デイヴィドソンは次のように説明する。「話し手が、自分がある文を真と見なしていることを知っているならば、話し手は自分が何を信じているのかを知っている」 (Davidson[2001a=2007:33])。つまり言語学者 A は自分の信念を知っている。しかし現地人 B の信念に対しては簡単に類推することはできない。第一人称の権威と他者信念との間には非対称があり、それは他者が「命題的態度をもつかどうか」 (Davidson[2001a=2007:156]) という問題に辿り着く。命題的態度とは信念、欲求、希望などの「命題的内容を捉えたり抱いたりする仕方」 (Davidson[2001b=2007:34]) である。命題的態度をもつことは「合理的な動物である」 (Davidson[2001a=2007:157]) ための不可欠の条件であり、それを前提しなければ解釈をおこなうことができない。言語学者 A が「あてはまる」と類推したのは、B が命題的態度をもつとしなければこれ以上解釈が進まないからである。詳細は次稿の主題とする。
- 6 「ローティが真理についてのプラグマティズムを放棄するならば、私 (Davidson) も自分の立場を斉合説や対応説と呼ぶことを止める」という条件。ローティがプラグマティズムの真理論を退けたので「私は喜んで私の責務を果たす」と述べられている (Davidson[2001a=2007:245])

[引用・参考文献]

Davidson, D. 1984 *Inquiries into Truth and Interpretation*, Oxford: Oxford University Press

=1991 野本和幸他訳『真理と解釈』勁草書房

Davidson, D. 2001a *Subjective, Intersubjective, Objective* Oxford: Clarendon Press=2007 清塚邦彦他訳『主観的、間主観的、客観的』春秋社

Davidson, D. 2001b *Problems of Rationality*, Oxford: Clarendon Press=2010 金杉武司他訳『合理性の諸問題』春秋社

Davidson, D. 2005a *Truth and Predication*, Harvard University Press=2010 津留竜馬訳『真理と術定』春秋社

Davidson, D. 2005b *Truth, Language, and History*, Oxford: Clarendon Press=2010 柏端達也他訳『真理・言語・歴史』春秋社

飯田隆 2002『言語哲学大全IV真理と意味』勁草書房

Rorty, R. 1989 *Contingency, Irony, and Solidarity*, Cambridge: Cambridge University Press
=2000 齋藤純一他訳『偶然性・アイロニー・連帯』岩波書店

Luhmann, N. 1990 *Die Wissenschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main = 2009a 徳安彰訳『社会の科学 1』、2009b 徳安彰訳『社会の科学 2』法政大学出版局

Tarski, A. 1935. "The Concept of Truth in Formalized Languages." In Tarski 1983, pp. 152-278.

Tarski, A. 1936. "The Establishment of Scientific Semantics." In Tarski 1983, pp. 401-408

Tarski, A. 1944. "The Semantic Conception of Truth and the Foundations of Semantics."

Philosophical and Phenomenological Research 4 pp. 341-376=1987 飯田隆訳「真理の意味論的観点と意味論の基礎」坂本百大編『現代哲学基本論文集Ⅱ』pp. 52-120 勁草書房

Tarski, A. 1983. *Logic, Semantics, Metamathematics. 2nd ed.* (Edited by Corcoran, J.)

Indianapolis: Hackett Publishing Company. [1st ed. (Edited and translated by Woodger, J. H.) Oxford: Clarendon Press, 1956.]

佃繁 2010「倫理の相互性の言語論的起点—総合的ア・プリアリの否定と「寛容の原理」—」『プール学院大学研究紀要 第50号』、2010年、pp.55~69

佃繁 2012「倫理の起点と「世界の複雑性」2—「心」の消去—」『プール学院大学研究紀要 第52号』、2012年、pp.51~65

佃繁 2014「倫理の起点と「世界の複雑性」4—社会システムの「観察」と「自己」—」『プール学院大学研究紀要 第55号』、2015年、pp.27~43

佃繁 2015「倫理の起点と「世界の複雑性」5—タルスキが準備したもの」『プール学院大学研究紀要 第56号』、2015年、pp.29~42

Quine, W.V.O. 1960 *Word and Object*, MIT Press, Cambridge, Mass. =大出晃他訳 1984『ことばと対象』勁草書房